
WORKING!! -個性的なファミレス-

神無月愛衣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

WORKING!! - 個性的なファミレス -

【Nコード】

N7932Y

【作者名】

神無月愛衣

【あらすじ】

北海道某所にあるファミリーストラン『ワグナリア』。

ここには、『ミニコン』の男子高校生や、『男性恐怖症』の女子高校生、小さい頃から帯刀している二十歳の美人フリーターなど、個性的な店員ばかりが働いていて――!!?

小説を書く前に

これは、私、神無月愛衣が好きなアニメ『WORKING!!』の小説です。

この小説の登場人物は、以下の通りです。

〈登場人物〉

- | | |
|--------|---------|
| ・小鳥遊宗太 | ・伊波まひる |
| ・種島ぽぷら | ・佐藤潤 |
| ・轟八千代 | ・山田葵 |
| ・相馬博臣 | ・白藤杏子 |
| ・松本麻耶 | ・音尾兵吾 |
| ・音尾春菜 | ・山田桐男 |
| ・小鳥遊一枝 | ・小鳥遊泉 |
| ・小鳥遊梢 | ・小鳥遊なずな |

毎回、キャラの視点を変えていこうと思っています。

基本は、自分でストーリーを考えますが、『こんな話を書いて欲しい!』というのがあれば、書こうと思

っています（その際は、メッセージをお願いします）。

更新を頑張りますので、是非読んでください♪

小説を書く前に（後書き）

これはあくまでも前書きみたいなものなので、見なくてもいいし、見てもいいです。

私的には、この小説を書いていることを知って貰えればいいので。

今から更新していきますが、アドバイスや、感想を是非書いて欲しいです。

これからよろしく願います。

一品目 小鳥遊宗太の悩み（前書き）

と言つことで『第一話』です。

どうぞお楽しみください♪

一品目 小鳥遊宗太の悩み

北海道某所にあるファミリーストラン『ワグナリア』。

おれ——小鳥遊宗太は、このファミレスで毎日アルバイトで働いている。

家では、鬱陶しい姉たちの面倒を見て、このファミレスでは、『男性恐怖症』のとある年増の相手をして、毎日忙しいばかりである。

「ハア……」

考えるだけで憂鬱だ。

どこへ行っても、年増の相手をしなければならぬ。何処かに『楽園』はないだろうか……。

ちっちゃくて、可愛いものばかりの『楽園』が……。

そんなことを考えながら歩いていると、おれはいつの間にか、『ワグナリア』に到着していた。

「まあ、ここに来れば、先輩もいるしな……」

そう思いながら、おれは従業員用のドアを開けた。

「あ、かたなくん！ 今来たの？」

と、明るく声を掛けたのは——

「あ！ 先輩！ おはようございます！」

「おはよう、かたなくん」

学校とファミレスの先輩の——種島ぼらである。

先輩は、ちっちゃくて。

先輩は、可愛くて。

先輩は、おれの『妹』になってほしいくらいのちっちゃくて可愛い先輩なのである。

「もう！ かたなくん！ 『ちっちゃい』って所を強調しないで

よ！」

先輩は、いつものように怒っていた。

「あゝ！ 怒ってる先輩も可愛いな」

「逆効果！？」

どうやら先輩は、おれが先輩の『可愛さ』を強調したことがショックだったらしい。

身長が低いのは先輩の悩みだもんな……。

でも、そんな悩んでいる先輩も可愛いのだが。

「先輩はいつもちっちゃくてちっちゃくて可愛いもんな」

おれはいつものように、先輩の頭を撫でた。

すると先輩は、

「もゝ！ しょうがないな、かたなくんは」

と、お姉さんぶっていた。

正直、可愛い。

あー。世の中、先輩みたいなちっちゃくて可愛い人ばかりだったらしいのにな……。

「じゃあ、おれ着替えてきますね」

「はい」

そう言っておれは学校の制服から従業員用の制服に着替えるため、更衣室へと向かった。

「おー、小鳥遊。来てたのか」

着替えて働こうとしたおれに、大人の女性の声が掛かった。

「店長……」

おれは店長がパフェを食べているのを見て、溜息をついた。

「またチーフに作ってもらったんですか？」

「ああ。腹が減ってたからな」

「佐藤さんに怒られますよ？」

「構わん。食べればそれでいい」

そう言って、右手に握っているスプーンでパフェを一口取り、食べる。

「……怒られても知りませんからね……」
年増のことなんて、どうでもいい。

それより、仕事だ、仕事。

「——では、ご注文は以上でよろしいでしょうか？」

そう言っておれば、テーブルを後にする。

今日は天気が悪いからか、客が少ない。

どうやら、今日の天気予報は当たったみたいだ。

「雨……降らなかったらいいね……」

「そうだね……。雲が多くなってきたから、今日は早めに食べようか……」

「そうだね。そうしょっか」

なんて、お客さんの声も聞こえる。

「雨……降るんだろうか……」

「そうだね……。私傘持ってきてないから、もし降ったらどうしよう……」

「え？先輩、天気予報見なかったんですか？」

「うん。忘れちゃったから……」

少し落ち込みながら、先輩は言った。

可愛い……。

「……かたなくん、私のこと、また可愛いって思ったでしょ？」
「え？」

いきなり先輩が話を切り出してきたので、おれは思わず驚いてしまった。

「ハア……。かたなくんには、私が何言ってもだめだね……」
「……」

「何を言つての駄目なことは、背がちっちゃいのと、佐藤さんにい

じめられることの次くらいの悩みだよ」

「先輩……」

その悩みの順だと、おれのことは三番目ってことだよな。けっこうな悩みではないか？　これは。

「ねえ、かたなくん。かたなくんには、悩みとかないの？」

「悩み……か……」

うん……。よく考えてみれば、悩みなんていっぱいあるぞ。例えば……。

………何か考えるだけでいらいらしてきた。

「………年増………！」

「え？　何？　かたなくん」

「一枝姉さんや、泉姉さんや、梢姉さんとか………！　とにかく！　年増の相手をしないといけないのが悩みですね！」

「か………かたなくん！　落ち着いて………！」

いつの間にかおれは本気になっていた。それを見ていられなくなつたのか、先輩は必死で止めていた。

「だ………大丈夫？」

「ふう……。落ち着きました、先輩。もう大丈夫です」

「そっか………よかった」

安心したのか、先輩はにっこりと微笑んでいた。

「かたなくんも結構大変だね」

「そうですね。ただでさえ、姉さん達の面倒を見てるって言うのに………」

「ん？」

「伊波さんの『世話係』もありますからね。前、店長がおれを労って『世話係』を解任したとき、あのままにしていけばよかったんですかね」

と、このときおれは、特に悪気はなく、冗談のつもりだった。それなのに。

「冗談では済まなくなってしまった。」

「か……かたなしくん……」

「ん？ 何ですか、先輩」

よく見ると、先輩は、『今言っちゃいけなかった！』みたいな顔をしていた。

「どうしたんですか？ せんぱ——」

その時だった。

ガッシャーン！

と、皿が割れた音がした。

「ん？ この音は……。また山田か。全く、山田も困るな」

と、そこで思い出す。

そう言えば、今日は山田シフト入ってなかったな。

じゃあ、一体誰が……。

その人物は目の前にいた。

肩を震わせて、泣いていたのは——

「い……伊波さん……？」

そうだった。

伊波さんも、今シフト中だった。

ってことは——今ここにいて皿を割ったってことは——今の、先輩との会話を、聞いていた？

「……………」

伊波さんは、少しだけ泣いていた。

「ち……違うの！ 伊波ちゃん。これは……その……かたなしくんの冗談で……」

先輩は、必死に、この誤解を解こうとしていた。

「そうですよ！ 伊波さん。おれは、最後まできちんと、い——」

「……………犬の面倒を見る……でしょ？」

伊波さんは、おれの言葉を遮るように言った。

いや。

実際、遮ったんだろう。

「わ……私、小鳥遊くんが……面倒を……最後まで見てくれるって
言ってくれてこと……嬉しかったのに……」

「伊波さん……」

「だ……だから、男嫌いを直すこと……。小鳥遊くんを、一秒でも
早く殴らずに済むようにって……。頑張ろうって……。そう思っ
たのに……」

伊波さんの言葉は、途切れ途切れで上手く言えてなかったが。
普通に言うよりも、遙かに重かった。

「私は……結局、小鳥遊くんにとって……『犬』でしか……そんな
存在でしか……なかったんだよね？」

「……………」

「私のこと……犬としか、見てなかったんでしょ……！」
最後に、口を開いて、何かを言って、その場を離れていった。

「い……伊波ちゃん！ かなしくん！ 伊波ちゃんを追いかけな
きゃ！」

先輩は必死だ。

普通なら、伊波さんを追いかけるだろう。

けど、今のおれにはそんな簡単なことができなかった。

伊波さんが最後に言った言葉。

声が小さくて聞き取れなかったが、口の動きだけで何を言ってい
るかおれには分かった。

——最低だよ——

その言葉が、おれに重くのし掛かっていた。

一品目 小鳥遊宗太の悩み（後書き）

どうでしたか？ 『第一話』——『一品目 小鳥遊宗太の悩み』はいきなりこんな話から入るのは、正直どうかな〜って思いましたけど。

今放送中の第二期『WORKING・！！』は、こんな感じの、人間関係が、ストーリーを引き立たせているので、それに乗っかろうと思いました。

……でも、難しいですね、宗太の語りって。

『可愛い』とか、『ちっちゃい』とか、連呼してますもん。

そんなことしてたら、一話で終わらせるつもりだったのが、一話と二話に分けることになってしまいました。

ま、いいかな？

ってことで、『一品目 小鳥遊宗太の悩み』でした。

是非続きを見てください。

二品目 伊波まひるの想い（前書き）

『二品目 伊波まひるの想い』です。

タイトルからも分かるように、今回の語りはまひるです。

個人的には、結構まひるも好きなので、頑張ります！

それでは、召し上がれ♪

二品目 伊波まひるの想い

「ハア……ハア……ハア………」
疲れた……。

ファミレス『ワグナリア』から結構走ってきたみたい……。でも、仕方がない。

小鳥遊くんにあんなことを言われたんだから。気が動転しちゃったんだもん……。

「それにしても……酷かったな、小鳥遊くん……」
多分、私に気付いていなかったんだと思う。

だから種島さんもあんな風に小鳥遊くんのフォローをしていたんだろう。

それでも、あれは酷かった。

——前、店長がおれを労って『世話係』を解任したとき、あのままにしていればよかったんですかね。

確かに小鳥遊くんはそう言った。

「もう……、小鳥遊くん……の！ 馬鹿……！」

小鳥遊くんが殴られずに済むように。

小鳥遊くんが痛い思いをしないで済むように。

小鳥遊くんが幸せになれるように。

全部——小鳥遊くんのためだったのに……。

貴方のために、男嫌いを直そうと思ってたのに……！
頑張ってたのに……！

それなのに……！

小鳥遊くんは、ちっとも気付いてくれない。

鈍感すぎるよ……。

ぽつん。

と雨が降り始めた。

「そう言えば……、天気予報……雨だったっけ……」
どうしよう。私今、傘持っていないや……。

「今日は最悪だな……」

そんな風に、感情に浸っている間にも、雨はどんどん強くなっていく。

やがて、小雨から大雨になった。

そんな雨に紛れながら私は、

「うつ………！うつ………！うつ………」

涙を流した。

私が泣いていることなんて。

きつと雨が隠してくれる……よね……？

しばらくの間泣いていたけど、今私は泣きやんだ。

今はただただ、立ち竦んでいた。

雨に私は濡れ続ける。

「……………」

無言の時間が、絶えることなく流れていく。

このまま、永遠とこの時間が続くんじゃないのかって思ってた。
さっきまでは。

「——あらあら。ここにいたの？ 伊波ちゃん」

「え……？」

私の頭の上に、すつと傘を差す。

「探したんだから」

その人物は――

「や……八千代さん？」

ファミレス『ワグナリア』のホールチーフの、轟八千代だった。

「な……何でここにいて分かったんですか？」

「さあ……。チーフの感、かしら？」

「そうですか……」

今、チーフなのは、そんなに関係ないんじゃない？

「さあ、帰りましょ、『ワグナリア』に」

「え……」

「みんな、伊波ちゃんのこと、心配してるのよ？」

「……そう……かもしれないけど……」

「けど？」

私は、言葉を探すのが、大変に思えた。

だって、今の気持ちを、どう言葉にしたらいいのか、分からなかったから。

「か……小鳥遊くんは……私のこと……どうでもいいみたいだし……」

「……」

「……」

「せ……『世話係』も……嫌……みたいだったから……その……」

「気まずい？ 小鳥遊くん」

八千代さんの言葉は、真っ直ぐで、遠慮なんてなかったけど。

今、一番優しい言葉のような気がした。

「……はい」

私は、八千代さんの言葉に、素直に返事をした。

「そっか……」

八千代さんは、『やっぱりね』と言いたそうな顔だった。当たり前だ。

私が言えることは、それだけだから。

八千代さんもそれを分かって――

「でもね、伊波ちゃん」

と、驚くことに、八千代さんは言葉を続けた。

「貴女は小鳥遊くんに会うのが気まずいかもしれないけど……」

「……………」

「小鳥遊くんは、伊波ちゃんに、謝りたいと、そう思っているのよ？」

「え――」

それは、私にとって意外だった。

あの、十二歳以上の人を人間と認めず、『年増』と呼ぶ彼が。

一歳年上の私に？ 謝りたい？

「ほ…… 本当ですか……？ 八千代さん……」

「ええ」

八千代さんは、はっきりと断言した。

私にとってそれは、一番嬉しい返事だった。

「だから、帰りましょ？ 『ワグナリア』へ」

微笑んでそう言う八千代さんは。

輝いていた。

私はそんな八千代さんに、感謝の気持ちを抱きながら、

「…………… はい」

確かに、そう言った。

「…………… あ！ 伊波ちゃん！」

お店に入って途端、種島さんが、勢いよく私に向かって走ってきた。

「た……種島さん……」

「もう！ 伊波ちゃんの馬鹿！ 心配したんだよ！」

「うん……。ごめんね、種島さん」

私の所為で、種島さんに心配を掛けちゃったんだな……。
本当にごめんね、種島さん。

「い……伊波さん……」

と、不意に声が掛かった。

「た……小鳥遊くん……」

いつからいたんだろう。

私の目の前には。

小鳥遊くんがいた。

「あの……ですね、伊波さん……その……」

小鳥遊くんは、凄く戸惑っていた。

そっか。『悪かった』って、思ってくれてるんだ。

八千代さんの言った通りだったんだ。

私の心が、晴れた気がした。

「もういいよ、小鳥遊くん」

「え……」

「冗談だったんでしょ？ あれは……」

「……」

「私も悪かったと思うよ。冷静じゃなかったし……」

「伊波さん……」

「だから……、許すよ」

「はい……」

小鳥遊くんは、安堵の表情を浮かべていた。

その後、彼はこう続けた。

「おれの方こそ……。すみません」

「……いいよ」

私は、小鳥遊くんが謝ってくれた、それだけで嬉しかった。
……それはともかく……。

「あ……あの……。それでね……。？ 小鳥遊くん……」

「え？ 何ですか？」

「なんて言うか……。その……」

さつきから私はある『衝動』を押さえていた。

それがもう、抑えが効かなくなってきた。

「そ……その……えっと……」

「え——」

「い……いやああああ！」

バキッ！

そんな音が響いた。

「い……伊波……さん？」

「ご……ごめんね！ 小鳥遊くん！」

小鳥遊くんは、床に倒れて、驚愕していた。

私は、予想以上に殴ってしまったので、自分でも驚愕していた。

「その……さつきからずっと我慢……してたんだけど……つい……」

見ていた種島さんも、驚いていた。

でも、今の私はそんなこと、お構いなしだった。

「ごねんね……でも……」

私は、彼を見据えて、しっかりと、はっきりと言った。

「これからも、よろしくお願いします」

私の心みたいにな、いつの間にか。

雨はやんで、空は澄み切っていた。

そんな私は。

今日も小鳥遊くんのことを想いながら。

男嫌いを克服しようと思う。

二品目 伊波まひるの想い（後書き）

とりあえず、『二品目 伊波まひるの想い』、完結です。

なんか、『WORKING!』なのに、どうも書き方が私寄りに……。

ま、いつか。

今回の話で、やっとこれを書くのに慣れてきました。

次回も頑張りますので、読んでください。

神無月愛衣でした♪

三品目 山田のバイト生活（前書き）

今回の語りは山田です。

前は「恋愛」で、少しシリアス（？）だったので、山田の力で明るめにしよう！

みたいな感じです。

それでは、どうぞ、

三品目 山田のバイト生活

みなさんこんにちわ。

ちっちゃくて可愛い、みんなの山田です。

みんなの山田がやつと語りです。

山田好きの皆さん、お待たせしました。

今回は、山田好きの人達に送る、山田の山田による山田のための小説です！

是非読んでくださいね！

それでは、スタートです！

ガッシャーン！

「ああ……。山田、またやってしまいました……」

あゝあ……。小鳥遊さん、怒るだろうな。

前、山田がお店と自分のために、皿を割ったことを隠ぺいしようとしたのに……。それをあっさりと小鳥遊さんは見破りましたからね……。

さすが小鳥遊さんです。

相馬さんの方が、よっぽどかいいですけど。

それより……。

「皿、どうしましょう……。山田、今月はもう数え切れないほど割ってしまいました……」

あの表、書くの面倒なんですよね。

高いし、位置が。

でも、種島さんが身長を伸ばすためなので、仕方ありませんね。ここは山田が大人にならなくては！

「なら最終手段です……」
隠ぺい。

これしかありません。

「よし！ 山田の『山田皿割り隠ぺい作戦』、決行です！」

「……………おい、山田……………」

な……………何でしょう……………。

山田の背後から、もの凄い殺気を感じます……………。

「何を隠ぺいするって……………？」

何回も怒られた山田は、もう誰か分かります。

声だけで。いや、殺気だけで。

「た……………小鳥遊さん……………」

「一体お前は何回皿を割ったら気が済むんだー！」

「き……………きゃあああ！ や……………山田は悪くありませんっ！」

怖いです！ 恐怖の小鳥遊さんです！

鬼のような小鳥遊さんに、山田は一時間弱説教されました。

人のことは言えませんが、小鳥遊さん、仕事をしましょ……………？

「うつ……………。酷いです。外道です……………」

最後に小鳥遊さんは、山田の頭をぐりぐりしました。

痛いです……………。

死ぬかと思いました。

「こんな可哀相な山田を……………」

何でもみな放って置くんですか—————！？

こんな酷い目にあった山田を……………！

放置するんですか！？

もはや山田を見てくれるのは……………。

甘やかしてくれるのは……………！

「相馬さんだけです！」

さあ、山田は向かいます。

山田の『優しいお兄さん候補』である、相馬さん——相馬博臣に
会いに。

「や……山田さん……？　そんなにくつつかれると、おれが動きづらいんだけど……」

「大丈夫です。山田は相馬さんの邪魔はしませんから」

「だったら、邪魔になるから離れて欲しいな……」

ああ！　最高です！　相馬さんは！

爽やかなお兄さん。

優しいお兄さん。

もう、相馬さん以外に、山田のお兄さんはいません！

天涯孤独の山田のお兄さんは相馬さんだけです！

「……大体、山田さんは天涯孤独じゃないでしょ……？」

「何を言っているんですか。山田は天涯孤独のみですよ」

「ははは……」

冗談を言っているんでしょうか？　いや、確かに山田は天涯孤独じゃないですけど。

恐るべし、相馬さん。

山田の正体を知っていますもんね。

「とにかくです、相馬さん、こんな可愛い山田を甘やかしてください」

「ええ……。おれなんか？　甘やかすんだったら、小鳥遊くんの方がいいんじゃない……」

「あの鬼は山田を甘やかしてはくれません。甘やかしてくれるのは、相馬さんと音尾さんだけです」

「お……鬼って……。確かにそうかもね、小鳥遊くんは……」

おお！　山田の意見に賛同してくれました！
嬉しいです！　さすが山田のお兄さんです！

そんな風に、相馬さんとじゃれていたら、

「あらあら。仲がいいわね。二人とも」
って声が掛かりました。

この声の主は……。

「あ、八千代さん」

「轟さん、ナイス！」

相馬さん、何がナイスなんでしょう？

時々、言っている意味が分かりません。

もしかして、山田よりおかしい人なんだろうか。

かわいい相馬さんだけに。

「でも葵ちゃん、今シフト中でしょ？　ちゃんと働かないと、相馬くんが、甘やかしてくれなくなるわよ？」

「はっ！？　何ですと！」

「と……轟さん……」

山田の相馬さんが甘やかしてくれなくなる！

これは人生の一大事です！

「山田！　精一杯働きます！」

「その調子その調子。頑張ってね、山田さん」

「そうね、相馬くん。でも、貴貴方も働いてね？　佐藤くんだけに任せてたら、可哀相でしょ？」

「大丈夫だよ。佐藤くんはできる人だもん」

「そ……そう……」

相馬さんは、山田と同じように、仕事をさぼっていたんですね。

山田のお兄さんだけです。兄妹ですもんね。

「いつからおれは山田さんと兄妹になったのかな……？」

「決まっています！　出会った瞬間からです！」

断言できます！　山田は胸を張って、ちゃんと言えますよ！

「断言された……」

「さあ！　無駄話はそこまでよ、葵ちゃん。これからは、仕事」
「はい……」

「今日は私も一緒にやってあげるから」

「本当ですか！？　山田、八千代さんがいて心強いです！」

思わず山田は八千代さんにハグしました。

「あらあら。しょうがないわね」

八千代さんは頬に手を当て、困った感じにしています。
表情はそんなこと、全然感じられませんが。

「じゃあ、行きましよう！ 八千代さん」

「ええ」

と、さあ！ 今度こそ山田はやると決めた瞬間、

「八千代」。パフエ」

と、店長——白藤杏子の声が、八千代さんに掛かった。

それを聞いた瞬間八千代さんは、

「はい！ 杏子さん！ ただ今——！」

と、山田の傍を離れていきました。

「や……八千代さん！ 山田と一緒にお仕事するんじゃない？！」

「ごめんね、葵ちゃん。杏子さんからパフエを頼まれたから……。」

悪いけど、一緒にはできないわ」

「え……」

「でもね、葵ちゃん。一人でやることも、葵ちゃんが大人になるためには必要なことだから。それを成し遂げたらきつと相馬くんも、思う存分甘えさせてくれるわ」

「八千代さん……」

「頑張つてね！」

「はい！ 山田、頑張ります！」

山田がそう言ったのを聞いて、安心した八千代さんは、「杏子さ
くん！」と、店長の方へと駆けていった。

「山田……！ 頑張ります！ 見ていてくださいね、相馬さん！

山田の働きっぷりを！」

「……轟さん、上手い具合に言いくるめたな……」

「え？ 何か言いましたか？ 相馬さん」

「うつん、何も言っていないよ、頑張つてね」

そう言っ相馬さんは、山田にひらひらと手を振ってくれました。
それは、山田にとって、凄く嬉しいことでした。

「はい！ それじゃあ、行ってきます！」

さあ、山田は頑張りますよ！

今日で『今までの山田』は卒業です。

これからは『新しい山田』で行きます。

山田は今日から生まれ変わります！

きつと、山田が頑張って働いことを音尾さんが聞いたら、喜びますね。

そして、山田の『養子縁組』の願いも聞いてくれるかもしれません。

そのためにも……！

「山田、精一杯頑張りますっ！」

生まれ変わった山田、発進です！

……ちなにみ、その後、山田はまた皿を割って、小鳥遊さんに怒られました（今度は二時間です。一体どうやったら、こんな長い時間怒れるんでしょう？）。

小鳥遊さんの所為で、山田の『やる気ゲージ』は、一気にダウンです。

気分は急降下——どころじゃない程、落ち込みました……。

山田は、音尾さんが、養子縁組の書類を持って帰ってくるのを、働かずに、待とうと思います。

以上、山田の小説でした。

三品目 山田のバイト生活（後書き）

どうでしたか？ 『三品目 山田のバイト生活』は。

少し明るめにしたつもりです。前回は暗かったので。

山田の語りは、正直面白かったです。『山田』と何回も連呼するのは、少し大変で

したが。

次回は、八千代の語りで小説を書きたいです。

私は、八千代が一番好きなので、張り切って書きます！

では。また次回も見てくださいね。

神無月愛衣でした

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7932y/>

WORKING!! -個性的なファミレス-

2011年11月24日20時48分発行